

京都大学	博士（文学）	氏名	廖 明飛
論文題目	中國近世『儀禮』學の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>後漢の鄭玄は、『周禮』を「經禮」として、三禮（『儀禮』『周禮』『禮記』）に注釋を施して一家の學を爲した。「禮は鄭學」とも稱され、鄭玄注が禮學において唯一無二の權威を持っており、實に唐代以前では、十七篇の『儀禮』の全文に對して注釋した著作は鄭玄の『儀禮注』のみだった。唐代から北宋にかけて、『儀禮』の傳習は次第に低調となったが、南宋に至ると、朱子は『儀禮經傳通解』を編纂し、『儀禮』を「三禮」の「本經」「經禮」として重く位置付け、『儀禮』に對する研究の重要性を提唱し、後世の『儀禮』研究に多大な影響を與えた。また、宋末元初の敖繼公は千年以上に亘って尊ばれてきた鄭玄の『儀禮注』全體を「疵多く醇少し」と批判し、『儀禮集說』を著して鄭玄注に代わる新たな『儀禮』の解釋體系を打ち立てようとした。この『儀禮經傳通解』はその後いかに受容され、また『儀禮集說』はいかなる注釋書だったのか。そして、この二つの書物は近世『儀禮』學史上においていかなる意義を有しているのか。本論文は、上記のような問題意識を持って、朱子『儀禮經傳通解』と敖繼公『儀禮集說』を取り上げ、中國近世における『儀禮』學の展開を考察したものである。</p> <p>第一章「敖繼公『儀禮集說』の版本について」では、『儀禮集說』の各版本の流傳と變化の歴史的過程を考察し、各版本と學術史との關聯を論證した。</p> <p>『儀禮集說』のテキストには、元刻本、清鈔本、『通志堂經解』本及び『四庫蒼要』本と『四庫全書』本がある。元刻本は『儀禮集說』の最初の刊本であり、大徳年間に西湖書院で上梓されたものである。現存する版本から推測すると、『通志堂通解』本は『儀禮集說』の二回目の刊行であったと考えられる。『通志堂經解』本が世に現れたことにより、元刻本の流傳がすでに途絶えていた『儀禮集說』が再び世に流行することとなり、それに伴って敖繼公に對する評價も高まった。清朝の著作は、『儀禮集說』を引用する際に、元刻本ではなく、『通志堂經解』本に依據している。『通志堂經解』本を通して、『儀禮集說』は清朝における『儀禮』學のみならず、李氏朝鮮と江戸時代日本における『儀禮』學にも深く影響を與えた。『四庫蒼要』本と『四庫全書』本はともに『通志堂經解』本に據って抄寫しているが、テキストとしての信賴性は低いと思われる。『四庫蒼要』本と『四庫全書』本は、清朝の學者が一般に參考できるような書物ではなかったため、當時の學問潮流にはあまり關係のない存在であった。つまり、『通志堂經解』本こそが、『儀禮集說』の清朝における流布本であったわけだが、本論文により、元刻本の優位性がより明らかになった。</p>			

第二章「敖繼公『儀禮集說』における鄭玄注の引用と解釋」では、『儀禮集說』における鄭玄注の引用とそれに對する敖繼公の解釋を中心に考察した。

敖繼公は「横讀法」によって鄭玄注を引用し、引用した鄭玄注に對してしばしば按語の形で自らの解釋を加えている。彼の按語の内容は、鄭玄注の意味と出典・根據を示すものが大半を占める。鄭玄注の意味を適切に理解できなければ、經文の意味を理解することもできなくなってしまう。敖繼公は經文を理解するために鄭玄注を解明しようとしたのだと考えられるが、そのみならず、經文の理解に關わりなく、鄭玄注そのものを理解しようとする姿勢も窺うことができる。つまり、敖繼公は『儀禮』の經文だけでなく、鄭玄注自體をも自身の研究對象として扱っていたのである。乾隆中後期からいわゆる「清朝考證學」が盛んになると、漢學墨守の立場から、敖繼公の鄭玄注批判の側面ばかりが否定的に注目されるようになり、敖繼公の鄭玄注に對する深い理解については顧みられなくなっていった。本論文で述べたように、鄭玄注に對する賈公彥疏の解釋の不十分・不適切なところにおいて、敖繼公は適切に再解釋・再考察を行っているのである。それは彼が鄭玄注のみならず、賈公彥疏をも深く研究したことの證であることは言うまでもない。元朝の經學者は古注を輕視し、注・疏の意味をよく理解していなかった、とは清朝以來の經學史の通説であるが、少なくとも敖繼公については決してそのような評價は妥當では無いと言わなければならない。

第三章「敖繼公『儀禮集說』の解釋法—鄭玄『儀禮注』との比較をめぐって—」では、鄭玄『儀禮注』との解釋方法の差異をめぐって、敖繼公『儀禮集說』の特質を解明した。

鄭玄は經文の前後の文（縦）の文脈を分析して經文の字句の意味を確定し、文脈によって同じ經文であっても時として異なる解釋を施し、時には尊卑の區別を見出す、という觀念的な解釋をした。これに對して、敖繼公は「横讀法」を用いて、ある儀節や經文について、當該の語句だけでなく、篇内もしくは他篇の類似する儀節の語句をも參照・比較しながら、その儀節の作法や經文の意味を確定して解釋を一貫させていったのである。鄭玄は『儀禮』を解釋する際に、他經（『周禮』や『禮記』など）を根據として、經書と經書を關聯させて総合的に理解しようとした。一方、敖繼公は『儀禮』を經禮として、『儀禮』本文を中心として『儀禮』を解釋しようとしたのである。「横讀法」はある經文を解釋する際に、『儀禮』の篇内もしくは他篇の類似する經文・儀節を參照しながら解釋する方法なので、結局のところ、その解釋法は、『儀禮』本文によって『儀禮』を解釋する方法と同じく『儀禮』本文自體を實證的に研究しようとする手法なのである。本論文で述べたように、少なからぬ明清時代の學者が敖繼公の新たな解釋に賛成したのは、敖繼公の個別の解釋に賛成したというより、このような實證的な研究の方法に賛成しているのではないかと考えられる。

このように、敖繼公は自分の解釋によって、『儀禮』注釋の權威としての鄭玄注か

ら『儀禮』を解放させ、『儀禮』を新たに解釋することが可能であることを後世の學者に示した。それ以來、『儀禮』は自由に解釋されるのである。例えば、明朝後期の郝敬『儀禮節解』や清朝初期の姚際恒『儀禮通論』などがその典型的な例である。

『儀禮』の注釋史から見れば、敖繼公の『儀禮集說』こそは漢魏の「古注」から宋元の「新注」への轉換を實現させたのである。

第四章「敖繼公『儀禮集說』と朱子『儀禮經傳通解』—その繼承と修正—」では、敖繼公『儀禮集說』は朱子『儀禮經傳通解』をいかに繼承・取捨しているのかを、文獻整理と經義解釋の両面から考察した。

朱子は『儀禮』讀解上の難點を克服するために、『通解』で『儀禮』の本文に以下の三つの處理を施している。①經文を章節に分け、章名を立てた。②鄭玄以來の、經文の末尾に記文全文を配置する形式を、記文を分割して對應する各々の經文の後に挿入する形式に改め、經と記を容易に相互參照できるようにした。③單行する賈公彥『儀禮疏』を經・注文にそれぞれ對應させて挿入し、經・注と疏文とを一覽できる體裁に添削・改訂した。

これに對して『儀禮集說』は、『通解』の①の體裁を踏襲し、經文の章節を分けている。また、疏文の引用については、賈疏の原文ではなく、『通解』の改訂文(③)をそのまま採録した箇所が少なくない。また、記文については、『儀禮集說』は『通解』の②の體裁を踏襲せず、經文の末尾に記文を置く本來の形式を残しており、その理由を自ら「後序」で説明している。『儀禮集說』が積極的に『通解』を參考にするものの、記文の處理については例外的に『通解』に従わなかった理由の一つは、朱子の「經書復舊」觀にある。

『儀禮集說』は、書名は「集說」と言うものの、鄭玄注・賈公彥疏の他には、宋代の張載、呂大臨など僅かに數家の「先儒の説」が引用されるだけである。そのうち『通解』の朱子按語の説からの引用箇所が最も多く、文獻整理の面でのみならず、經義解釋においても『通解』を積極的に參照したことがわかる。

第五章「明代陳鳳梧合刻『儀禮注疏』と朱子『儀禮經傳通解』」では、明代陳鳳梧が合刻した『儀禮注疏』の成立過程及びそのテキストについて考察を加え、さらに朱子『儀禮經傳通解』との關係を重點的に論じた。

陳鳳梧は、弘治十七年(一五〇四)から正徳四年(一五〇九)にかけて、湖南において『儀禮』の白文本二十二卷を校刊している。陳鳳梧の『儀禮』白文本は、一般的な『儀禮』の白文本や經注本と異なり、十七篇の『儀禮』經文に加えて、五篇の逸經が附されている。おそらく、楊復『儀禮圖』に附刻された『儀禮』白文と吳澄の『儀禮逸經』に基づいて編集したものであろう。正徳十六年(一五二一)には、陳鳳梧は河南において『儀禮』の經注本十七卷を刊行した。陳鳳梧の經注本は宋元刊の『儀禮』經注本を底本として再刊したのではなく、朱子『儀禮經傳通解』から『儀禮』の經

・注及び音義を抜き出して再編集したものである。嘉靖初期、陳鳳梧は山東においてさらに『儀禮』の注疏本十七巻を刊行した。陳鳳梧は、彼自身が正徳十六年に編集した『儀禮』經注本を基礎に、そこに單疏本に基づいて賈公彦疏を分散挿入して『儀禮』注疏本を作り上げた。總じて見るに、『儀禮』の經注疏合刻は、陳鳳梧の二十數年に亘る一連の『儀禮』出版事業の到達點である。

清朝の學者たちは明刊『儀禮注疏』本のテキストが『通解』と密接な關係を有することに注意しており、明刊注疏本は『通解』に基づいて校訂を加えられたのであろうと考えていたが、実際には、陳鳳梧注疏本が用いていた經注本が『通解』を材料に作られたものであることがその由來なのである。また、注疏本を編纂するに際しては、經・注と疏の文字との齟齬を調整する作業が必要であるが、陳鳳梧は基本的に疏の文字を經・注に合わせたので、『儀禮』經注本が『通解』に依據していたが故に、結果として『通解』に影響されて疏が改竄されることになった。また、陳鳳梧は『通解』に引く朱子の改訂した疏文に基づいて疏のテキストを改變した。従って、陳鳳梧注疏本から始まって、明代『儀禮』注疏本の經・注・音義・疏は、いずれも『通解』の影響下にあったとすることができる。

第六章「韓元震『儀禮經傳通解補』について—李氏朝鮮における朱子『儀禮經傳通解』受容の一側面—」では、これまで注目されることが少なかった韓元震『儀禮經傳通解補』を取り上げて李氏朝鮮における朱子『儀禮經傳通解』の受容と展開の一側面を考察した。

『儀禮經傳通解』は、朱子の最終的な撰定になるものではなく、朱子の未完の書と見なされている。後世の學者は朱子の遺志を繼いで完成させようとし、その續筆・再編・補訂が様々な形で試みられた。清朝の江永は『通解』とは別に新たな門類・體例を立てて『禮書綱目』を編纂し、梁萬方・梁開宗父子は『通解』を補訂改編したのに對して、李氏朝鮮後期の韓元震『儀禮經傳通解補』は朱子の言説・著述を集めることによって朱子の『通解』を補おうとしたのである。韓元震は晩年から『儀禮經傳通解補』の編纂に着手し、生前に編纂の繼續と謄寫を門人の李尚元と金教行に託したが、金教行の死後、その孫である金義淳の手によって『儀禮經傳通解補』はようやく完成・刊行された。韓元震は、朱子が『通解』を編纂した意圖は、周公の後を繼いで新たな王朝の制度（「一王の制」）を確立し、どのような時代にも通用する教訓（「萬世の訓」）を遺し、所謂「祖述」に止まらずに「制作」を目指すことにあった、と考えた。また、朱子は「制作」への志を持ちながら、謙遜してあえて「制作者」と稱することを避けた、と考えた。そして、『通解』は実際には「經傳古語」を採録するのみで、朱子自身が古禮を折衷し斟酌（増減）したものを採録していないが、それは、後世の人が朱子の考えを祖述して『通解』中に収録することでその制作の意圖を補完することを朱子が望んだもの、と韓元震は考えた。実際に、韓元震の『儀禮經傳通解

補』は、朱子の文集・語録及びほかの著作から「折衷損益」に關わる學説を見出して既存の『通解』の門類の中に編入している。それは、韓元震が朱子の未完成の書を完成しようとし、朱子が目指した「制作」を朱子に代わって韓元震が完遂しようとしたものなのである。以上のような韓元震の執筆態度は、李氏朝鮮における朱子一尊主義の立場による『儀禮經傳通解』發展の特異な形態の一つを示すものと思われる。

「結論」では、朱子『儀禮經傳通解』と敖繼公『儀禮集說』の近世における『儀禮』學上の位置について、本論文で明らかになったことをまとめた。

鄭學を墨守する清朝の考證學者は、敖繼公『儀禮集說』は『儀禮』の本來の經義を解明しようとしたものではなく、ただことさらに鄭玄に異を唱えようとしたものである、と批判している。しかし、実際にはそうではなく、敖繼公は朱子が『儀禮經傳通解』において提唱した『儀禮』を經禮として三禮の根本とする方針を踏まえ、『儀禮』の本文自體を實證的に研究しようという姿勢を示したのである。従って、むしろ敖繼公こそがはじめて『儀禮』の本文自體を本格的に研究しようとした人物だったとしても過言ではない。また、「實事求是」を標榜する清朝の學者は、敖繼公の鄭玄批判の一面を批判するものの、一方で敖繼公の解釋に賛成する場合も多いのは、敖繼公の『儀禮』に對する解釋方法が實證的なものであったからにほかならない。これらの事實に基づき、筆者は、『儀禮』解釋史上における『儀禮』に對する注釋書のうち「模範」といえる代表的著作について、近世以前のものとしては鄭玄『儀禮注』を擧げるべきであるが、近世以降においては敖繼公『儀禮集說』がその地位に相當する、と考えるのである。

また、朱子『儀禮經傳通解』の受容については、清朝の學者は明人が『儀禮注疏』を刊行する際に『通解』に基づいて校訂を行った、と考えたのであるが、本論文を通じて実際には明刊『儀禮注疏』の經注並びに音義は『通解』から抜き出して再編集されたものであることが明らかになった。このほか、これまで『通解』を補完しようとする書物については江永『禮書綱目』・秦惠田『五禮通考』などの清朝の著作が注目されてきたが、本論文は李氏朝鮮の韓元震『儀禮經傳通解補』を取り上げて清朝の著作と比較し、その朱子一尊主義の特色を明らかにした。

以上、本論文は近世『儀禮』學の展開における『儀禮經傳通解』と『儀禮集說』の新たな側面を見出したものと考えられる。

今後の課題としては、本論文では十分に検討できなかった『儀禮經傳通解』に觸發され成立した徐乾學『讀禮通考』を始めとする清朝の一連の著作の内容を全體的に検討し、その背後の思想の動向を解明したいと考えている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、中国近世における『儀礼』研究において重要な位置を占める南宋の朱子『儀礼経伝通解』（以下『通解』）と元初の敖継公『儀礼集説』（以下『集説』）を中心に考察し、近世『儀礼』学研究に新たな見通しを与えようとする意欲作である。

『通解』が持つ重要性はこれまでも語られてきたが、『集説』は、清朝の学者がその「鄭玄批判書」たる性格のみに注目したことによって、その評価が現代まで引き継がれ、これまであまり顧みられることはなかった。しかしながら、論者の考察により、先行研究の不備を指摘し、この書物の注釈書としての性格が明確に提示されたことは、とりわけ本論文の大きな功績である。なにより古来難解を以て知られる『儀礼』を、注釈も含めて精読した上でなされる本論文は、その基礎作業の充実ぶりだけでも既に高く評価できるものであることをまずは特記しておきたい。

第一部は、『集説』に関わる研究である。第一章では、『集説』の版本について、阿部隆一氏の同書の元刊本の研究に基づきつつ、新たに清抄本や『通志堂経解』本との関係を考察する。そこでは、『通志堂経解』本がどのように元刊本を校訂したのかを綿密に検討することにより、『通志堂経解』本が、本文は明刊注疏本によって積極的に文字を改変し、敖継公注は明らかに誤字であってもほぼそのまま踏襲していること、『四庫全書』本ならびに『四庫全書薈要』本の校訂には不適切なところが多いことを指摘し、元刊本の重要性を実証的に再確認する。

第二章、第三章は、『集説』と『儀礼』鄭玄注の関係について考察する。第二章では、『集説』の鄭玄注の引用の仕方に注目し、その引用の仕方自体に、敖継公の鄭玄注に対する考え方が表れていることを指摘し、また、彭元瑞が敖継公の「横読法」と呼ぶ、経文を他の儀節と比較して文字を校正する方法を、敖継公が鄭玄注を引用する際にも使うことを、綿密な調査に基づいて明らかにするとともに、鄭玄の『周礼』注、『礼記』注を引用することも含めて敖継公がさまざまな工夫をしていることを指摘する。さらに、同じく鄭玄注に従いつつ注釈をすすめる賈公彦の『儀礼疏』との違いを考察した上で、敖継公が、鄭玄注そのものについて探究心を持ち、客観的に研究していることを明らかにする。これは、「敖継公は鄭玄を批判している」とされるこれまでの一面的な理解に対する新たな指摘として、極めて重要である。

続いて第三章では、敖継公と鄭玄との相違に注目して論が進められる。論者は、儀節の説明に重きを置かない鄭玄に対して、敖継公が儀節の分析に重きを置くこと、さらに鄭玄が三礼を総合的に考えるという意識であるのに対して、敖継公はあくまでも『儀礼』を『儀礼』本文相互の検討によって解釈するという方法を徹底したものであることを指摘する。

第四章では、『集説』と『通解』との関係について考察する。これまで『集説』に対する『通解』の影響についてはほとんど見過ごされてきたが、論者は両者を綿密に比較検討することにより、『集説』が『通解』をどのようなかたちで継承し、さらに朱子の按語をどのように吸収したのかを考察する。まず、『集説』の賈疏の引用が、

朱子による改変を経た『通解』の引用文を踏襲していること、ならびに『儀礼』の「記」の文章の扱いについて、『通解』の形式には従わないものの、朱子の「経書の古い形にもどす」という基本的な姿勢を守るものであることを指摘する。さらに、敖継公の注釈の姿勢は、それを朱子のもものと明記せぬものの、朱子の注釈や礼説を使いながら、独自の解釈を作り上げていることを明らかにする。

第二部は『通解』の「受容の研究」として、『通解』の後世における展開を考察する。第五章は、明代陳鳳梧の『儀礼注疏』の刊行と『通解』の関係を扱う。そこでは、陳鳳梧本『儀礼』白文本が、楊復『儀礼図』に付刻された『儀礼』十七篇の経文と呉澄『儀礼逸経』に基づくこと、陳鳳梧本『儀礼』経注本が、音義も含めて『通解』に基づくこと、さらにこの経注本は、楊復『儀礼図』と『集説』を参照して校訂を行っていることを明らかにする。明代に三度にわたって刊刻された十三経注疏本の『儀礼注疏』について、その起源となったのは陳鳳梧の注疏本であり、この系統の本を、清儒は『通解』を用いて校訂されたものと考えてきたが、そうではなくて、まさに『通解』を底本にしていることを明らかにしたことは、極めて重要な指摘である。

第六章では、李氏朝鮮の韓元震『儀礼経伝通解補』を取り上げる。清代には、『通解』を補う書として、たとえば江永『礼書綱目』は『通解』の門類・体例を批判して新たな門類を立て、梁万方・梁開宗父子考訂『重刊朱子儀礼経伝通解』は『通解』所引の経書の注を旧注から新注に差し替えるなど、いずれも『通解』に対して少なからず改変を行った。これに対して『儀礼経伝通解補』は『通解』の原文を一文字も改変せず、かつ徹頭徹尾、礼に関する朱子自身の言説を収集する方針を取るという特徴を持ち、かつ韓元震は『通解』に、朱子の「制作」の意志を見いだし、『儀礼経伝通解補』はその「制作」を完成させるものとして作られたものであることを指摘する。

本論文を通して評価できるのは、第一章、第五章の版本を中心とする研究における調査の綿密さ、ならびに論文全編にわたって、テキストの精密な読解に基づき、極めて手堅く実証的な論が展開されていることである。さらに、第三章に於ける『集説』が『儀礼』を鄭玄注から解放したものであるとする指摘などの新たな知見も含め、今後本論文が『集説』と『通解』を研究する者の必読文献となることは疑いない。

ただ、鄭玄と敖継公の注釈の比較にはなお検討の余地があると思われ、さらに望むなら、もう一步踏み込んで、思想史的な面での深い考察があればと思われる。ただそれは論者が今回の論文をもとに、これから思索を続けていくはずのものであり、今後の進展を待ちたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2018年2月22日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。